

0000 『日英等価変換（翻訳）の手法の高度化・精緻化のための資料』（岩垣守彦）

まえがき

中学三年の教科書で金田一京助の「心の小径」を読みました。終わりのところの「ことばは心の城壁に通じる唯一の小径である」という文章が記憶に残って、「ことば」に関心を持ちました。大学院を出て英語に関わる仕事について、はじめは万年筆で原稿を書いていましたが、印刷所の求めに応じてワープロを使うようになり、さらに人生の後半になって、コンピュータを使うようになりました。そのうち「機械翻訳」という研究分野を知りました。この分野に関心を持ったのは、母語を通して生得的に獲得する言語感覚のない機械、言い換えると、母語も異言語もない機械に言語を扱わせることができるとかという点でした。人間が異言語を創造的に使うことが出来るようになるのは、言語というものの正体を母語で身につけ、それを土台にして、母語対異言語の対応辞書を脳の中に作り、異言語の法則を覚えて創造的に（とは言っても、多くの場合、基準となる文を多く覚えて模倣して）文を作るということです。アメリカのパパード氏はつとにそれは機械では無理だと判断しました。「翻訳」というのは、単に表層の表現を対応させるだけではなく、表現から書いた人の心をも読み取りながら表層の表現を別の言語で表すことだからです。たとえば、吉行淳之介の『夕暮れまで』の中に、次のような文があります。

大型バスが走っている。舗装された道が一本、まっすぐに続いている、その左右はひろびろとした野原である。

表層の表現を追って英語的に対応させて変換すると

A large-type bus was moving along the paved road. The road ran straight, and open country extended on both sides of it.

となります。これは英語として文法的には間違いない表層変換です。翻訳とは異なります。「翻訳」すると次のようになります。

The large bus was moving along the road, a solitary, paved road that ran straight ahead, flanked on either side by an expanse of open country.

出だしから違います。「対応訳」の方は文法通り、最初に出てきた名詞なので不定冠詞(A large-type bus)を付けていますが、「翻訳」の方では定冠詞(The large bus)で始めています。それは、この日本文から、「当人はバスに乗っている」と解釈したからです。「翻訳」とい

うのは「原文解釈」に裏打ちされた「文法的正しさ・当該言語の習慣的正しさ」でなければならぬのです。機械には「解釈」はできませんし、多分、「当該言語の習慣的正確さ」の定型化も完全には出来ないのではないかと思いました。パパードさんは正しい判断をしたと私は思いました。ただ、「機械翻訳」的に言語を観ることによって、もしかしたら、従来の言語学習とは異なる効率的な学習方法が見えてくるかもしれませんと期待しました。つまり、機械には母語を通して生得的に獲得する言語感覚がないので、人間の場合とは異なる「異言語の法則と対応の仕方」が必要だろう。そのためには、言語の固有性を最小にするという観点から言語の法則性を捉え直す必要があるだろう。それを確かめてみたいと思いました。

そこで、大学で同僚のベスター夫人からご主人の日本文学翻訳家ジョン・ベスター氏を紹介してもらい、私の目論見を了解してもらってから、日本語と英語の等価変換（翻訳）を実際に行いながら等価変換（翻訳）に必要な法則性と変換の仕組みを探ろうと作業しました。その作業は、日本文を {単位情報（単位イメージ）} に分解して英語の {単位情報} に対応させ、両言語の固有性を損なわないように努めながら、出来るだけ情報（イメージ）順に連結して変換するという方法でした。私たちは日本文を選び、持ち帰ってそれぞれ訳文を創り、一週間後に会って検討するという作業をしました。私は新宿のワンルームマンショニ部屋を借りて、大型のテーブルを置き、天井から高性能のマイクを垂らして、向かい合って座り、コーヒーを飲む音、辞書をめくる音まで収録しながら、作業を収録しました。それを整理したのが以下の資料です。いま聞き返してみると、翻訳の手の内を知る貴重な資料と思われます。

長年一緒に仕事をし、私にいろいろ英語について教えてくれたベスターさんも、アラン・ブース氏ももうこの世にはいません。私も90歳に近づき、もうあまり時間は残されていません。それで、翻訳とか言語教育とか機械による等価変換とかに関心のある人の参考資料になるように残しておきたいと思ったわけです。言葉に関心のある人には、読むだけでも面白いのではないかと思います。

資料はどれも

「日本文」

「英文として許容できる英訳例」

「翻訳例」

の順になっていて、日本文を一文ごとに分割して英訳と翻訳の手の内を注釈として付けました。注釈は

■は元日本文を表す

★は語彙・表現に関すること

◆は文法に関するこ

●は文の組み立てや {単位情報} の [連結辞] に関するこ

と区分してまとめています。もし間違ったことを書いてしまっていたら、それは私の理解不足によるものです。